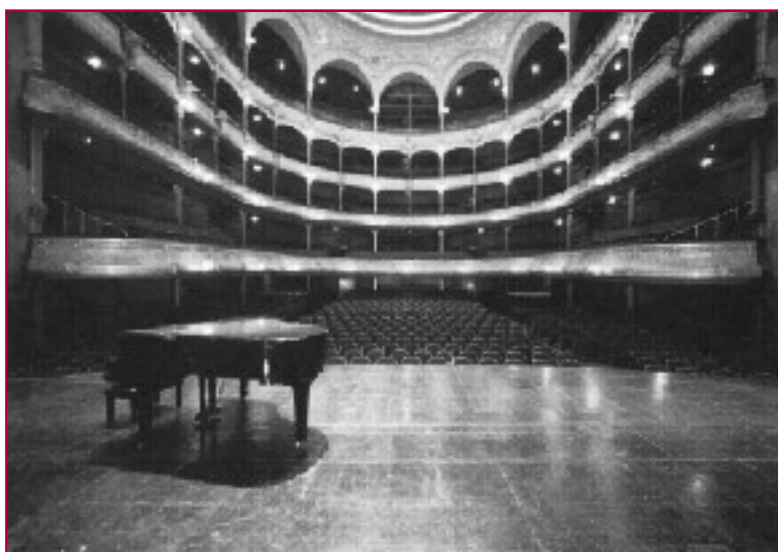


声楽家・コレペイトウアのための パリ・シャトレ劇場滞在研修

今年二月十一日から十四日まで、大阪と東京で、日本人若手声楽家とコレペイトウアを対象に、第二回パリ滞在研修のためのオーティションが開催され、四十四名が



とコレペイトウアは、今年一月に渡仏し、すでにシャトレ劇場の作成するプログラムに沿って研鑽を積んでいる。同劇場で上演されるオペラの稽古見学や特定の役柄のアンタースタディ、また音楽顧問による直接レクシオンなどを受ける多忙なスケジュールが組まれている。

応募ソプラノ、メソソプラノ、ピアノ、ピアノスト各一名が合格した。これは、当財団とパリ市立シャトレ劇場が企画した半年間の滞在研修で、一九九九年に第一回オーティションを実施。劇場という、実際の公演が制作される現場で才能あるアーティストの実力をさらに磨いていくことを主眼としている。

初回の合格者

二名(メソソプラノ

「ミリア・ミュージュー」があるが、これは若手発掘の機会となっている屋の「ミューズ」で、研修生はこれに出演することが要請される。パリは文化

コレペイトウアという言葉はまだ一般に広まっていないが、オペラ上演にはかかせない役割。オーケストラとのリハーサル以前の段階で、指揮者の意図をくみ出し、演歌手にピアノで歌唱指導を行うスタッフのことである。伴奏の技術もさることながら、オペラのレパートリーに精通し、しかも複数の外国語ができなければならぬ。現在の日本の学校教育ではピアノ伴奏者のカリキュラムはあるが、この分野はまだ確立されていない。その意味で、特にコレペイトウを目指す日本人にとってはこの研修が貴重な経験となるだろう。

芸術を世界に発信する都市であり、一流のジャーナリストやプロキータのみならず、耳の肥えた多くの観客たちがいるこのコンサートへの出演は、このような人々に対して積極的なプロモーション活動を行う絶好のチャンスである。

シャトレ劇場は、革新性と芸術性の高いオペラやコンサートを一流のアーティストを招いて上演されていることで知られている。例えば今年のプログラムでは、グルックの「アルチェステ」ではフォン・オッターが、またモーツァルトの「ミドリタイエ」ではジュゼッペ・サバティエーラが出演している。彼らの稽古を目の当たりにできることが、どれほど貴重で、大きな意味を持つかはいうまでもないだろう。六ヶ月という短い期間だが、彼らが大きくステップアップすることを期待したい。



第1回研修生の飯坂純さんと増田貴代子さん

La Lettre

DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo



笹川日仏財団
ニュースレター
Vol. 4 No. 1

新しいフランス演劇



現在活躍するフランスの演出家や劇作家などが
パネリストとして招かれた

世田谷パブリックシアターでは、昨年から今年にかけての一年間、「フランス現代演劇の一年」と題して、フランスの現代演劇の舞台作品と人物交流を中心に活動を行ってきた。
二月五日、六日には、現在活躍する演出家、劇作家などを招き、シンポジウムも開催。ビデオ上映と劇作家本人によるリーディング、また日本の演劇人ともパネルディスカッションも行われ、日仏交流の好機となったのである。

イヨネスコやベケットなどフランス演劇は、日本の劇作家や演出家に大きな影響を与えてきた。しかし小劇場演劇が主流となった一九八〇年代以降は、日本演劇の視野からはフランス演劇はすっかり姿を消していった。その間、フランス演劇は、演出家の時代から劇作家の時代へと変貌。その意味からも、今回の催しはまさにフランスの新しい息吹を肌で感じるこの上ない貴重な体験となったのである。

シンポジウム第一日目は「言葉と舞台」フランスの新しい演劇人たち、二日目は「劇場とコミュニティ」をテーマに、各々約四時間にわたって行なわれた。メンバーは、先頃フランスで上演された『東京ノート』（平田オリザ）の戯曲の出版を手掛け、自ら演出家として活躍するフランソワ・ベルールやその上演劇場となったプレスト劇場ディレクターである、ジャック・ブラン、また劇作家で俳優のフィリップ・ミンヤナ、小説家で詩人のオリヴィエ・カディオ、「リベラシオン」の記者のジャン＝ピエール・ティボーダ氏ら、現在第一線で活躍する演劇人が多数出席した。

日本人が持つ演劇の枠を軽やかに越えた表現

両日とも意見交換の前に、フランス人劇作家の演劇の抜粋をビデオ化したもの、また世界的に活躍する振付

日本側からも、劇作家の宮沢章夫、世田谷パブリックシアター専属演出家、松本修、演劇評論家の西堂行人らが参加した。

家のジョセフ・ナジによるダンス公演の一部をビデオ化したものが上映された。いずれも十分たらずだが、私たち日本人が持っている演劇やダンスの枠を軽やかに越えた表現に驚かされる始まりとなったのである。

たとえば、ミンヤナ氏の『目録』は、とあるスーパールの広場で開かれる「言葉のマラソン大会」の話だ。ごく普通の三人のおばさんが、それぞれの十分に充たされた人生のエピソードを微に入り細に入り、早口で語っていくだけの映像だ。それは一見、教訓めいた内容や深い感動を与えるものとは程遠い。しかしこの機関銃のような言葉の羅列から、生きることの真実が次第に浮かび上がってくる。

またダンスの映像は、歪んだ椅子、埃にまみれた部屋、ミイラのように包帯を巻いた男など、舞台背景から登場人物まで、まるで抽象絵画が動き出すような錯覚に陥る。とてもダンス公演とは思えない斬新さなのだ。

セリフを音として 戯曲を楽譜として

二日間のシンポジウムは、主に新しい演劇スタイルの誕生と公共劇場の活動という異なる内容だったが、浮き彫りにされてくる共通点は、フランスの発想の豊かさである。

まず第一日目は、新しい演劇

スタイルが課題だった。現在フランスでは、従来の伝統的でストーリー性のある描写ではない演劇が生まれているとジャック・ナンソン氏。「戯曲を書く上で、新聞記事やインタビューのテープなどを素材に、フィクションとして再構成することで、新しい演劇が生まれています。しかもその演劇が二〇世紀前半を代表する作家ポール・クロデルと並び、高校の授業で扱われるまでになっています。」

九〇年代の表現方法は、従来のドゥラマトゥルギーに添ったものではありません。たとえばセリフを内容でなく、音として捉え、ある音だけを強調したり、リズムミックスに語ったりして、戯曲を楽譜のように扱っています。これは、絵画ならば具象から抽象への変化と同じものといえるのです。」

その一例として、フレデリック・フィスバックと平田オリザで共同演出された『東京ノート』を中心に話が進められていった。この作品は、サン・ドニ市のジェラルド・フリップ国立演劇センターがサツカーのワールドカップに関連させ、参加三二カ国の劇作家の作品を翻訳上演するにあたり、日本代表として選ばれたものだった。



ジョセフ・ナジ
公演パンフレット

特に静かな日常をリアルに描くことで特徴のある平田オリザの代表作だが、「あれだけ写実に徹している作品が、なぜ抽象なのか」と宮沢章夫が疑問を呈したように、フランスでは、平田演出とは異なる非現実的な舞台として完成。「セリフを音楽のように扱い」、「二五人の俳優の動きは、抽象的な振り付けを見るようだった」と、フランス人からの感想が述べられた。

地方に登場した ユニークな共同体

二日目の「劇場とコミュニティ」では、一九九〇年代になって、急速に若手演劇人たちが公共劇場のディレクターへと進出していった過程とその後の活動が内容である。

特に九〇年代初めまでに、フランス各地に公共劇場が建てられ、施設の充実のみたものの、創造性の伴わないものでしかない現実があったという。上演されるものは、「従来の演劇の枠を決して越えようとはしない古典ものにとどまっていた。クリエイションの場であるべきはずが、単に芸術を消費する場所になりさがっていった」とティボーダ氏。

だが、この状況に抵抗する動きが生まれてきているのが現在のなのである。たとえば、昔の工場跡を劇場にしたり、住居としても住める場を



「ヴォイツェック」公演
終演後のポストトーク

持つ劇場だったり、仮設テントで移動したり、一日二四時間、三六五日オープンさせたりと、数々のユニークなコミュニティの試みが紹介された。

また、資金調達など経済基盤をどこに持つかなどは日仏双方、共通の切実な問題として浮かび上がってきた。

ジャック・フラン氏が指揮するプレスト国立演劇センターでは、「大がかりなスペクタクルを可能とする大劇場と、演劇の可能性を探求する実験的試みの「コミュニティ」、両方の収支バランスをとる資金の流れをシステムとしてつくった。また別の劇場と共同制作したり、資金を援助されるものもある」という。しかし、それはまだごく一部の動きでしかないのが現実だとも。

日本の演劇界でも六十年代後半に芸術革命が起り、唐十郎、佐藤信らが登場。しかし現在もまだなおその時代に執着し、その後の

変化に名称をつけることができないうな戯曲なのか。抽象絵画を例にしたフランス演劇とは？会場で上映されたビデオでもよい。何らかの素材を活用して話を進めるなど、もう一步踏み込んだ具体例が少しくてもあれば、より一層、日本人がフランス演劇の現在を知る機会となり得ただろう。

もう一步踏み込んだ 議論を期待

特に両日ともミンヤナ、カディオ両氏の戯曲を自ら朗読するドラマリーディングが行なわれたがフランス語が理解できない参加者のための工夫があってもよかったのではない。来日メンバーには、字幕作成プログラムを実施している仏外務省の外郭団体であるAFAAの職員も含まれていたのである。字幕プログラムを活用する手立があってもよかっただろう。

こうして二日間 にわたって、両国の演劇人同士の話し合いの場が持たれた。しかし、専門家はまだしも、その内容が一般の観客に、どこまで伝わったかは残念ながら疑問が残る。

たとえば、フランス人の言う「楽譜のような戯曲」とは、どのよう

なもの、日本の公共劇場で一年間という長期に渡り、こうした催しが開かれたことは、両国にとって有意義な機会となった。特に言葉の障壁を越えて理解していかねばならない難しさを含む演劇世界にあって、このような試みを持つことは重要だ。これを機に、今後さらに深まる交流を期待したい。

この二一世紀こそ、演劇という空間の可能性を信じてやまないフランスと日本、両国の演劇人の情熱に触れることができただけでも意味があった。



会場からの質問に答える
ジョセフ・ナジ(中央)

フランス出版事情

毎年20万人を集めるパリのブックフェアが今回第20回目を迎え、3月17日から22日まで開かれた。そこで最近のフランスの出版事情を調べてみた。

『リヴル・エポド』誌によると、99年の書籍販売額は前年度と比べ2.5%の伸びが予想されている。その中でも特に児童書、実用書、コミックスの売上げが増大したようだ。文芸書は日本同様苦戦を強いられているが、その中でも一体どのような本が売れたのだろうか。

総合週刊誌『エクスプレス』と『L』の調査によると、99年小説部門ではフランスのベストセラー作家、ダニエル・ペナックの『Aux fruits de la passion』(情熱の果実)、ガリマール社)が、随筆・ノンフィクション部門ではサッカーの前フランス代表監督のエメ・ジャケ氏がサッカーに捧げた彼の人生とワールドカップ優勝までの軌跡を綴った『Ma vie pour une étoile』(栄光への人生、ロベール・



『ロック辞典』も発売された。いまなぜ辞典なのか。「ますます多様化・矮小化する知的好奇心にこたえようとするもの」という意見がある一方、大教養主義への希求が薄れていることの兆しと見る向きもある。



ラフォン・ブロン社刊)がトップの売上げを記録したという。

ところで、いまフランスでは辞典出版がブームだ。総合週刊誌『ヌーベル・オブセルバトゥール』(2月24日・3月1日号)によると、95年辞典類の刊行は102冊にとどまっていたが98年には220冊へと倍増した。それも従来はクリスマス時期に集中して発売されていたのが、最近は何年間を通じてコンスタントに出ているのが特徴だ。昨年は老舗出版社ラルースからだけでも14冊もの辞典が発刊されている。利益分水嶺が6000部とされている辞書類にあって、例えば、『シンボル辞典』(ラフォン社『ブキヤン』シリーズ)は累積45万部という驚異的な売れ行きである。同社からは最近『ロック辞典』も発売された。

薄手の紙を用い、開いたままにしておける装丁、しかも安い価格設定をしたラフォン社の『ブキヤン』シリーズのようなタイプで出版していることもその成功の理由かもしれない。同じく、『ヌーベル・オブセルバトゥール』(3月2日・8日号)によると、ここ数年フランス人の詩への情熱が高まっているという。パリの地下鉄で詩の朗読会の案内をだしたところ、8000人も参加者を記録したことや、この2年間で100以上の書店が詩のコーナーを新設したこと、また出版社100社あまりと雑誌300誌以上が毎年6月パリのサン・ウスター・シュ広場に参集することなどが記事で触れられている。昨年はこのような詩に関する2500もの催し物がフランス



また、ガリマール社の『ポエジー・コレクション』も大成功を収めている。エリュアールは40万部、アラゴンが30万部、アポリネールの『アルコール』にいたっては100万部の売上げを記録した。同時代詩人に関してはこれほどの部数ではないものの、ブームは決して例外ではない。通常詩集の出版は小規模なもので、年間総数15冊、1冊あたりの印刷部数は100部どまり。これを3、4年かけて完売させるペースだったのが、現在は初版の段階ですでに2000部が印刷される。このような現象には、先にあげた国立書籍センターが81年から開始した詩への出版助成が関係しているとの声もある。

この詩への情熱は一時の流行? 又全国で企画され、それにあわせて詩に関する書籍や雑誌の販売が好調なのだ。国立書籍センターからの報告された数字もこの現象を裏付けている。この4年間に詩歌に関する出版物が387冊から600冊へと激増しているという。

Petite note

編集後記

本年3月24日笹川日仏財団は10歳の誕生日を迎えました。フランスでは珍しい基本財産を持つ民間の助成財団で、試行錯誤の10年でしたが、今後とも皆様のご指導賜りますようお願い申し上げます。

(M)

笹川日仏財団ニュースレター

La Lettre

2000年4月発行 Vol. 4 No. 1
 発行人: 富永 重厚
 編集人: 関 晃典
 発行: 笹川日仏財団
 〒108-0073 東京都港区三田3-12-12
 TEL: 03 (3769) 6252
 FAX: 03 (3769) 2090
 E-mail: matsugam@spf.or.jp
 http://www.spf.org/ffjs/

プロジェクト・カレンダー

2000年4月～6月

4月14日～5月7日

《京都の暑い夏2000》

《日珍シヤラ》による共同ワークショップ

京都の暑い夏事務局/於京都

会場/関西日仏交流会館、ヴィラ丸

条山、関西日仏学館、東山

青年の家、京都芸術センター

ワークショップのスケジュール

A/クリエイターワークショップ

坂本公成+森裕子

4月14、15、16、21、22日 全5回

J・L・サスポーテス(独)

4月23、27日 全10回

ヴェロニカラルシエ(仏)

5月1～9日(全9回)

フレイ・ファウス(仏)

4月28～5月7日(全9回)

ヴァンセント・S・マントソ(南ア)

4月28～5月7日(全9回)

5月3日は休み

B/ダンス・クリニク

黒字さなえ

4月28～30日 全3回

C/ピギナークラス

森裕子

4月28日

フレイ・ファウス

4月29、30日

黒字さなえ

5月1日

ヤザキタケシ

5月2日

ヴァンセント・S・マントソ

5月3日

ヴェロニカラルシエ

5月5～7日

D/ビデオ上映+交流会

4月28～5月7日

S/ヴァンセント・S・マントソ

スペシャルワークショップ

5月12、13、14日 全7回